

タイトル	コミュニケーション研究のヨーロッパ種とアメリカ種 下：マートン知識社会学の研究
著者	犬飼，裕一
引用	北海学園大学学園論集，135：A1-A26
発行日	2008-03-00

コミュニケーション研究のヨーロッパ種とアメリカ種 下

——マートン知識社会学の研究——

犬 飼 裕 一

「……けれども、私は、或る人々のようにそれほど極端に学問の価値を認めるわけではない。たとえば、哲学者ヘリロスは、学問のうちに最高善を認め、学問のうちにはわれわれを賢明にさせ満足させるものがあると考えているが、私はそうは思わない。また、他の人々は「学問はあらゆる徳の母であり、あらゆる悪徳は無知から来る」と言っているが、私はそうは思わない。たといそれが真実であるにしても、それには長い解釈が要る。」(モンテーニュ『エッセー』、松浪信三郎訳)

目 次

はじめに

1. マートン、常識から常識の矛盾を突く知性
2. ヨーロッパ種とアメリカ種
3. 用語法と概念構成
4. 専門家と大衆——仮説演繹法と経験帰納法
(以上、第一三三三号)
5. 単独の研究者と組織された研究者

6. 戦争とプロパガンダ
7. 歴史家という先行者
8. 芸術との関係
(以上、第二三四号)
9. 理論家と歴史家の反撃
10. 受け入れがたい統合の試み
11. 統合以外の選択肢?
12. 質的研究という対抗案
13. 歴史をめぐる理論的考察…バウマン『近代とホロコースト』
結論…走り去る馬と動かない馬車

9. 理論家と歴史家の反撃

「今日、文化人類学を考えるのにいちばんぴったりと当てはまる表現をすれば、不親切なものに近い方かもしれないのですが、それはほかの社会科学や人間科学と違って、直接役に立つことがほとんどないというこ

とです。いわば文化人類学はその学問自体がおとぎ話とか神話であるといった性質をもっている。これは、つまり、時代の知の表層の部分で役に立たず、深層の部分で役立つということの意味します。(山口昌男『文化人類学への招待』、岩波新書一九八二年)

このような議論になると、「ヨーロッパ種」の人々は、すぐにトマス・クーンの「パラダイム」概念に飛びつきたくなってしまう。彼らの論理の道筋はおおよそ次のようなものである。歴史家の組織と社会学者の組織の間に生じた相違は、要するにパラダイムの相違であり、両者の間で経験的知識が共有できないこと自体が、すでに経験帰納主義の限界を示しているのではないか。歴史家の組織と社会学者の組織が生み出した食い違いを架橋するのは、結局のところ経験的研究ではなくて、あくまでも仮説演繹法を得意とする「ヨーロッパ種」の理論以外にありえないのではないか。そもそも、経験的研究の枠組みを決定するのは特定の個人や集団が生み出したパラダイムであり、その逆はない。枠組みなくして経験的研究をするというのはどういうことなのか、そんなことがどうやって考えられるのか、というわけである。

本稿の議論に照らし合わせながらこのような形に展開してみると、クーンの「パラダイム」論が、なぜ広い領域であれほどまでにもてはやされたのかについて、通説とは多少異なった理解が可能になる。通説では、クーンの「パラダイム」概念は、科学史の中で何度も起こった断絶を説明する概念として提示され、同時に二十世紀の冷戦下に登場したイデオロギーをめぐる対立を、それぞれの立場

から比喩的に説明するのに便利な概念とも見なされていた(例えば、経済学をめぐるマルクス経済学と近代経済学の相違、さらにはそれらの下位パラダイム間の相違など)。クーンによれば、ある時代に特定の「パラダイム」にのっとった科学が勢力をもつと、人員の拡大と共に分業化が進行し、「通常科学(ノーマル・サイエンス)」が成立する。巨大な組織を伴う通常科学に属する人々は自分たちのパラダイム以外を認めようとはせず、他のパラダイムに従う人々との間でしばしば論争や人的・経済的資源をめぐる闘争を行う。その一方で、肝心のパラダイムが研究の途上で行き詰まり、危機に陥ると、人々は何とかしてパラダイムの再生や延命を図るのだが、次第に新たなパラダイムに基づく科学が取って代わり、「科学革命」が起こるのだという。革命には特定の革命家が不可欠であり、誰でも思いつく人名は、「ガリレオ」であり、マートンが研究してきた「ニュートン」であろう。確かに、この種の説明図式は、「革命」をめぐる賛否両論のイデオロギーやプロパガンダの闘争に彩られた二十世紀以後の世界に暮らす人々にとって意味深長であった。

その一方で、クーンの「パラダイム」概念を、ますます力を増しつつあるアメリカ流の経験帰納主義に対して危機感を抱いた、「ヨーロッパ種」の側からの反撃として理解することもできるのではないだろうか。つまり、科学の「パラダイム」は経験帰納主義一本だけではなくて、他にも存在可能であり、しかもそれは歴史的に変動するのだ、今現在は覇権を握っていても、後にやってくる「科学革命」によって別の「パラダイム」が勢力をもつようになるのだというわけである。もちろん、クーンの「パラダイム」論は、仮説演繹法と、

あつらえたようにびったりと呼応する議論でもある。「科学革命」を引き起こす新たなパラダイムを提示する人物——革命家——が、独自の芸術的(あるいは宗教的)直感によってそれを着想したとしても、提示された理論が科学的検証(反証)に耐えうるものであるならば困ることは何もないわけである。ごく個人的で気まぐれな着想が、独自に洗練されて科学的な「仮説」へと昇華していく例は、別段珍しいものでもない。ごく個人的であっても、たとえ気まぐれであつても、特別な能力をもった「偉大な人物」は、多くの人々には不可能なことを成し遂げうるのだという信念がここにはある。巨大組織の下で無数の人員が働く「アメリカ種」にあつては久しく追放されていた「才能」や「天才」といった言葉が、ある種の懐かしさを伴つて帰ってくるわけである。

以上のように議論を展開することで、ヨーロッパ種は自分たちの流儀の優越性を印象づけようとする。それは「グローバル化」という現実に即した戦略であつたとも考えることができる。「パラダイム」論は、知識の歴史性を強調することによつて、「アメリカ種」の手で科学(学問)全般から追放されそうになつた「歴史」や「芸術」の名誉回復をするという役割を果たしてきたのではないだろうか。完全な名誉回復とまではいかないまでも、「アメリカ種」によるグローバル化では決して認識できない認識対象が、科学には存在するのだと考えるわけである。

ただし、「反撃」や「復権」について考えることは、ある種の屈辱的体験でもある。自分と自分たちが覇権を確立しており、それが磐石の安定感を誇っているのならば、「反撃」や「復権」などというこ

とは、考える必要はない。ところが、一旦劣勢に立たされるや否や、状況は変わる。失われたものをなんとかして取り返そうとすることや、損失を最小限にとどめようとすることは、自動的に自らの劣勢を認めることなのである。

その上、この種の反撃は、残念なことに「ヨーロッパ種」に属する人々にしか通用しない。「アメリカ種」の人々の多くはこの種の議論に興味を抱かないからである。もちろん、マートンのようなマジナルな人物は例外である。例えば、マートンの管理下で戦時期の軍部によるプロパガンダの効果を経験的に確定していた人々の多くは、科学研究における仮説構成の先行といった問題とは無関係に日々自分に与えられた仕事をしていたはずである。その場合、イデオロギーやプロパガンダの「効果」は問題になつても、それらと現実との差異といったことは問われない。明確な実目的に向かつて研究を行う彼らにとつて重要なことは、与えられた目的を実行することと、そのための組織を維持することである。さらにいえば、組織として運営されている「通常科学(ノーマル・サイエンス)」がさらに発展することや、組織が掲げる目的を達成することなのである。組織を基礎づけている理論や仮説やパラダイムを疑うことは、組織の存立を危うくする可能性を秘めているので、通常は避けられる。この点は、社会通念に対する批判を志向し、通常単独、あるいは少数の集団で研究を行う「ヨーロッパ種」とは根本から異なっている。

このことは、「ヨーロッパ種」に対する「アメリカ種」の優位を知識社会的に説明するものでもある。ごくごく簡単にいえば、各々

単独「ヨーロッパ種」は、組織で活動する「アメリカ種」には、少なくとも他の大規模組織に訴えかける影響力の点でかなわない。個人の製作による著述の魅力では、「ヨーロッパ種」に軍配が上がるにしても、より多くの研究費を獲得し、より多くの「研究業績」を挙げるといふ点では「アメリカ種」の敵ではない。また、広告・マスコミ各社や大企業、行政、軍部といった組織の意向をそのまま生かすという点でも「アメリカ種」は適している。あくの強い思想家気取りの「ヨーロッパ種」が、こうした仕事に不向きなことはあらためて考えるまでもないだろう。

他方、「アメリカ種」の「ヨーロッパ種」に対する優位には、一種の「敵失」による部分もあることを忘れてはならない。マートンが代表するアメリカ型の学問——「アメリカ種」——がここまで優勢を実現できたのは、十九世紀末ヨーロッパの学問を占領した論争とも関係しているからである。それは、「客観的事実」をいかに確定しうるのかという問題や、「純粋な学問」をいかに実現するののかという問題をめぐる論争であった。これらの問題をめぐって対立しあう「ヨーロッパの諸学の危機」(フッサール)は、互いの論敵が抱える独断的性格や概念の曖昧さを互いに指摘しあうなかで、より深刻になっていく。熾烈な論戦が長年にわたって続けられ、何が「客観的」であり、何が「事実」であり、何が「純粋」なのか、という問題について極限まで考え抜いた議論が展開された。私の知る限りでは、二十世紀初頭のマックス・ウェーバーによる一連の議論がその頂点にある。もちろん、その後も論争は続き、二度の世界大戦や東西冷戦をはさんで、いわゆる「ポストモダン」といわれる現象にまで尾

を引いている。

しかし、それは同時にヨーロッパの学問それ自体の自滅行為という宿命をも背負っていた。「ヨーロッパ種」内部での内紛は、互いに敵対する立場の根拠を掘り崩す結果となった。論争を演じる中で、彼らは自らにもあてはまる欠陥を相手に対して指摘しあってきたわけである。結果として、マートンのいう「ヨーロッパ種」は、どれもこれも曖昧な概念による思弁ばかりであり、科学の名に値しない独断でしかないというところに行き着いてしまう。それらのなかには何一つ確実な事実はなく、あるのは「古典」や「偉い学者」の権威や、時の権力への追従や、時代の流行ばかりなのだということになってしまう。しかも「ヨーロッパ種」の人々は、権威や権力に対して皮肉な態度を取ることを若い頃から訓練されている。ここから、「何でもあり」という半ば開き直りに近い状況に陥ってしまう。「大きな物語」を偉そうに語っていた「古典」でも、政治家が毎度力説する社会問題でも、「サブカル」「オタク文化」でも、すべては文化だ、文化多元主義だ、ということだ、思考が停止する。行き着く先は、欲望の無限肯定であり、「ヨーロッパ種」全般を根底から支持してきた「教養」と呼ばれてきたものに対する憎悪である。

「ヨーロッパ種」の自滅行為が決定的なのは、彼ら自身が自分自身の学問 (Wissenschaft) が無意味だと公言するところにある。いわゆる「ポストモダン」を掲げた人々の通弊がここにあった。学問も哲学も無意味だと公言することが一種の流行となり、盛んにその種のことを公言する。しかも、冷戦終結で、今まで信じてきた「大きな物語」が信じられなくなった人々の自暴自棄が加わる。その種の

人々が、「ポストモダン」言説を増幅するマスコミに登場して、日々一般向けに承認を与え続けるわけである。

ところが、当人は権威ある大学の講壇や学閥、有力新聞・出版社を足場に、自分が属する党派の主張する「大きな物語」を繰り返していたわけである。旧来の権威を掘り崩すことにかけては容赦のない人々が、自分が依拠する権威については、まったく寛容な態度に変化してしまう。この種の欺瞞は、しばらく時間を置いてみればよくわかる。要するに「自分以外の学問と権威は無意味だ!」という主張を行っていたのと同じである。事態は、フランスの哲学者ジャック・ブーヴレスの言葉を借りれば、「哲学者の自食症候群 (Le philosophe chez les autophages)」そのものである。

「ポストモダン」の流行は、専門家や知識人以外の人々が住む社会から疑惑の目で眺められるようになる。このことは、簡単な想像力を働かせて見ればすぐわかる。自ら「学問は無意味だ」と主張する人物とその仲間の学問を、専門家ではない人々は、いったいどうやって信頼したらよいのだろうか? 「学問は無意味だ」と叫ぶ学者に、一般から集めた大事な税金や親会社が認めてくれた予算を研究費として提供するなどというのは間違っているのではないか? そう疑うのは、良心的な公務員や財団の運営者として健全なことであろう。そして、「ヨーロッパ種」がこのような「自食」に耽っている間にますます地歩を固めていくのが「アメリカ種」である。しかも、「アメリカ種」は、自分たちの学問が、確実な経験的検証を経ていることを誇り、しかも実用に役立つと請合う人々である。経験的に得られた事実の信頼性に対する自省や相互批判は盛んに行っても、自分

たちがやっている研究そのものの意義について疑うことはない。相互批判から認識論の泥沼にはまり込んで身動きが取れなくなるといったことはありえないのである。マートンが論じたように、「事実」を究明するだけならば、「ヨーロッパ種」は「アメリカ種」の経験帰納主義の敵ではない。しかも、当人たちは自分たちの学問が「ヨーロッパ種」よりも確実な科学であり、実用的でもあると請合っている。こうして、多種多様な「ヨーロッパ諸学」が相撃ち状態に陥り、自滅する一方で、今日の「アメリカ学」の全盛時代が出現したと考えることもできる。

個人的な感慨を述べさせていざと、マートンによる半世紀以前の文章は、年来「ヨーロッパ種」に対して感じていた違和感や不信感の原因をかなり特定できた。また、ある種の「ポストモダン」言説からの世代的な影響を、かなり客観視することができるようになったことを感謝したい。いうならば脱魔術化、あるいは「憑物落とし」の効果である。

10. 受け入れがたい統合の試み

「今日、人はきわめて安易に、我々は技術の時代に入ってきた、あるいはもつと正確に言えば、科学の時代に入った、——科学の功績のおかげで、はじめて技術というものが生まれたのだ、ときめつけます。こういうものの見方は外部からする証言です。しかし、こういう確証の背後に隠れている内部の変革が、いかに根本的で深刻であるかは、まだぜんぜん意識されていません。あるいは、それはあまりにも深刻であるために、まだはつきり我々の意識に映ってこないのだ、と言ったほうが正しいか

もしれません。」(フルトヴェングラー『音と言葉』、芳賀禮訳)

本稿ではここまでマートンの議論を足場にして「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の相違や、力関係の逆転について考えてきた。「ヨーロッパ種」に加担していることを自覚する筆者は、日ごろの圧迫感を反映し、両者の対立や相違点ばかりを強調してきた。しかし、マートンの名譽のために言い添えておくと、この人の意図は別のところにある。マートンにとって、「両者を比較するもう一つの目的は、両者の科学的長所を備えながら、しかも両者の不必要な欠陥をもたない巧みな組合せを目指して、これらの関連しあつた社会学的研究領域の統合を提唱すること」(四〇二頁)なのである。

その実例として挙げているのが、マートン自身による十七世紀イギリスの科学者をめぐる研究である。当人の説明では、「十七世紀イギリス科学者の研究関心の焦点がどこにあつたのか印象主義的にではなく、系統的に決定し、また当時の経済的必要と科学の研究方向との間にどこまでのつながりがあつたかを粗雑ではあるが、客観的に確定しようとする」ことにあつた(四一〇頁)。

「科学」と「経済」の間には何らかの関係があるのは間違いないのだが、両者の間の関係を経験的な事実として確定することは容易ではない。そもそも「科学」や「経済」という概念を経験的に確定可能な概念として構成し直さなければならない。漠然とした「科学」と何でもありの「経済」という言葉の間に何らかの説明をするだけならば、難しいことではない。ニュートンも給料をもらつて生活していたのだから、「科学」に対する「経済」の影響は否定しようがない

いからである³⁾。

「社会経済の発展と科学の発展の間に相互作用のあることは、ほとんど議論の余地がない。しかし分析されないままの一般論の形で、科学に対する社会経済の影響を云々するのでは、ただ問題を提起しただけに止まる。科学の社会学を研究している人は、そこに見られる影響の型(有利な、または妨害となるような)、これらの型が異つた社会構造の中でどこまで力を発揮するかその範囲、またそれらが作用する過程に特に関心をもつていゝる。しかしたとえ暫定的にもせよ、これらの問題に答えるためには、用いる概念用具を明確にしなければならない。神話詩的、英雄的科学史観を排する社会学者は、社会発展と科学発展の間に単純な平行を見出そうとする俗流唯物論に落ちこむことが余りにも多い。このように努力の方針を誤ると、論議は必ず重大な歪みをもち、支持できなくなる。」(五五六頁)

言い換えれば、神話や英雄伝と俗流唯物論の中間にマートンの考える知識社会学が位置している。本稿の議論を踏まえていゝならば、マートンのいゝ「ヨーロッパ種」は神話や英雄伝に陥る危険を伴つており、対する「アメリカ種」からは俗流唯物論が育ちやすいのだろう。「ヨーロッパ種」は、突き詰めれば、神に愛された天才や英雄が奇跡を起こすといった説明に行き着く。「アメリカ種」は、こちらも究極までいけば、すべては経済であつて、人々の日常生活の総和であつて、科学などは経済上の必要に沿つて便宜的に作られた手段でしかないということになる。「ヨーロッパ種」は科学(学問)の自立性を強調し、「アメリカ種」は実用性、あるいはマンハイムのい

えば「存在拘束性」を強調する。

学説史的な感慨にしばらくふけることを許されるならば、マンハイムが論じた「知識の存在拘束性」という議論は、知識(科学)の自立性を当然視するヨーロッパの知的背景においてこそ画期的だったのである。女神ミューズの靈感に導かれていたはずの知識が、実は現世の利害によって変化することもありうるのだという議論は、確かに衝撃的であつただろう。上空にそびえる神聖な偶像を地上に引きずりおろす作業であるということもできる。そこには、いわゆる「偶像破壊」が含まれていた。

このことは、先に論じた「ポストモダン」の議論につなげて考えるならば、意味深長であるということもできる。「ヨーロッパ種」各派の祭壇に祭られていた神秘の偶像を、同人同士が互いに破壊し合う行為は、二十世紀後半の知的世界にもそのままつながつているからである。マンハイム流の知識社会学が、予想外の結果として「自食症候群」に道を開いていると考えることもできるだろう。少なくとも批判者がこういう形で議論を展開することは可能である。

これに対して、アメリカの場合事情は全く異なる。商品販売や選挙や戦争遂行のために大衆の意見を刻一刻と追っていくことを身上とする「アメリカ種」にあつては、「知識の存在拘束性」などは自明のことではない。行政は税金を払うことが市民として当然の義務であり正義であると主張するし、住宅会社は新品の郊外住宅を与えてくれる幸せな生活を強調する。タバコ会社はタバコが無害だと何とか宣伝したいし、長期の総力戦を戦う軍部は国民の愛国心を使命感に基づく「士気」を何とかして鼓舞しつづけたい。その他、各組

織が各々の利害や組織原理に沿って、「意見 (opinion)」を生み出しており、無数の人々——大衆——が、それらに日々刻々賛同したり、反発したりしているわけである。そして、そのために各々の組織は、大勢の人員を雇って、できるだけ正確な経験知を獲得しようとする。それこそが「アメリカ種」にとつての「科学」なのである。この場合、マンハイム流の「偶像破壊」が破壊する対象がはじめから存在しないのである。

このように考えてくるならば、マートンがマンハイムの議論を取り扱う立場が、改めて理解できるようになる。マンハイムの「機能」は、「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の間で独自の媒介を果たすことにあつた。それは改めて説明するまでもなく、『社会学論と社会構造』に収録された論文「カール・マンハイムと知識社会学」(第十三章)に、まとまつた形で出ている。

「以上見た通り、マンハイムは知識社会学から認識論的帰結をひきだすに当って、いろいろな二律背反 (antinomies) に陥つたようであり、それは未だ解決されていない。後になつてようやく輪郭の示された線にそつて彼の立場をさらに修正していけば、疑いもなく彼の立場は筋の通つた、統合された分析体系に達したであろう。彼は知識社会学を適切に拡充すれば、それから認識論の真の革命が出てくると思つていたが、この認識論は大ざつぱな輪郭についていえば、アメリカ人にとつてしばらく以前からごく普通なものになつていた認識論だといえる。つまりデューイとミードに媒介されたパースとジェイムズの認識論なのである。そこでは、思考は数多くのタイプの活動中のただ

その一つにすぎないものとして、必ず経験とつながっているものとして、認識以外の経験との関連においてのみ理解できるものとして、いろいろな障害や一時的に欲求不満を起こすいろいろな状況に刺激されるものとして、具体的特殊に対しどんな意味合いを含んでいるかという点で絶えず再検討する必要のある抽象的概念を含んでいるものとして、実験的基礎に立つ限りにおいて妥当するものとして、みられている。マンハイムは、思考を方向づけ活動させる際に社会構造の果す役割を分析して、この貴重な分析を右の認識につけ加えた。(四六五頁)

マートンの議論内部でのマンハイムの「機能」は明らかである。それは、「ヨーロッパ種」の内部での「アメリカ種」の科学として(無意味な要素を失墜させ、マートンの信じる科学として知識社会学を再構成するのに、一定の機能を果たすことである。もちろん、この場合、「機能」という言葉は「意図」とは区別されなければならぬ。マンハイムが「アメリカ種」に奉仕することなど夢にも思っていないからである。ただし、「予想外の結果」は、ヘーゲル・マルクス以来の「弁証法」を信奉するマンハイムにとっては未知の現象ではないのかもしれない。

「アメリカ人にとってしばらく以前からごく普通なものになってきた認識論」によれば、「思考」——知識、学問——は他にも多数ある人間の活動の一部であり、他の活動に対して特別な地位を得ていくわけではない。公務員が税金を徴収し、住宅会社の社員が住宅を建設し、タバコ会社の社員がタバコを販売し、軍人が戦争遂行のために宣伝をするように、思想家は「思想」を、知識人は「知識」

を生産する。それだけのことである。「知識」、あるいは「知」と呼ばれるものに特権的な地位は認められない。それならば、「思想」や「知識」をよりよいものに改良していく必要があるだろう。それは、公務員がより円滑な徴税を工夫し、住宅会社がコスト削減によってより安価で良質な住宅を供給し、タバコ会社がタバコの品質向上に努め、軍人が各種の改革努力に余念がないのと同じである。各人はそれぞれの属する組織や住んでいる地域、社会階層の利害にしたがって活動していけばよいわけである。

ここまで議論を展開してくると、マートンが「相互の交配作用(cross-fertilization)によって、一方の理論的興味のある範疇と他方の経験的な調査技術とを共に備えた強力な雑種(a vigorous hybrid)が生ずる」(四一〇頁)と呼ぶものの本質が見えてくる。それは、一言でいえば、「アメリカ種」が信奉する「認識論」に「ヨーロッパ種」が得意とする「理論的興味のある範疇」を取り入れていくことである。ここではマンハイムの「欠陥」の原因となっていた「歴史」や「芸術」とのつながりは排除され、代わりに手堅い経験的調査技術が加わる。

ただし、重要な問題が残っている。そもそも、この種の統合案——「強力な雑種」——が好ましいものなのか? というということである。ひどく簡単にいえば、マートンが推奨する「雑種」が各自の学問観にとって好ましいものなのかという点にある。「好ましい」という表現は、もちろん単なる好悪感情を含んでいる。しかし、本稿で論じてきた「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の間の相違は、究極のところでは、どちらの学問観——あるいは学問観を成り立たせて

いる世界観——を「好ましい」として信奉するのかもしれないところに到達してしまうのである。私見では、マーソンの「雑種」は「アメリカ種」の人々にとつては好ましい強化策であるといえる。お家芸の実証研究に理論構成力も加わり磐石の態勢が可能になるように思われるからである。これに対して、「ヨーロッパ種」にとつて状況は困難である。従来「歴史」や「芸術」と手を携えて仕事をしてきた人々が、これらと手を切り、巨大な調査組織の一員として仕事ができるのか？ と想像してみるならば、多くの説明は必要ないだろう。

比喩的にいえば、この合併は決して対等合併ではない。むしろ、巨大多国籍企業よろしく「グローバル」に展開する「アメリカ種の」研究組織が、互いに仲の良くない「ヨーロッパ種」の中小個人営業多数を個別に買収するようなものである。刊行された書物の比率や漠然とした意味での「学界」における存在感、あるいは研究に従事する研究者の数の比率がどのようなものであるにせよ、両者の対等合併などはない。もちろん、このことは二十世紀後半以来の「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の力関係の変化を間接的に説明しているともいえる。一旦組織として成立した「アメリカ種」は、求心力と影響力の点で「ヨーロッパ種」など敵ではない。組織は組織自体を目的として再生産を繰り返す、システムは自己産出し、組織されない勢力を圧倒する。「真実」を明らかにすることだけを目的として組織された研究者たちは、明らかにされた「真実」に一体どのような意味があるのかということは問わない。特定の型の「真実」が注文どおりに明らかになり続けられれば、組織は維持され、さらに拡大していく機会をうかがうこともできる。そして、現に「アメリカ

種」の巨大研究組織は拡大を続けているのである。

これに対し、互いに反目し合い、互いの基盤を掘り崩すことを嬉々として続ける「ヨーロッパ種」には、たとえ各々に深遠な理論の魅力があつたとしても、「競争的資金」を獲得する市場にあつて「アメリカ種」に太刀打ちすることは不可能なのである。

11. 統合以外の選択肢？

「ほとんど二世紀にわたって、社会学は社会変動に関する概念やモデルや理論の財産を相当にため込んできたし、その間にも社会変動を論じる社会学的な接近方法そのものが変動してきた。豊かな遺産の中からいったいどの部分を在庫目録に加えるべきなのか？ 最近の、もしくは最も流行している傾向だけに限定し、過去のものには忘れるべきなのか？ 答えは絶対にノーである。社会学の叡智の中で最も貴重なものの一つは歴史主義の原理である。歴史主義によれば、現代のいかなる現象を理解するためにも、当該の現象の起源や現象が起こってきた過程を検討しなければならぬ。」(Piotr Szlompka, *The sociology of social change*, 1993)

ただし、私見では観点をかえて考え直してみる必要もある。それは、一言でいえば、本稿で論じてきた「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」を対等の競争者として捉える必要があるのか？ という疑問である。マーソンは両者を別個の「種」として考えていた。社会学の歴史上にマーソンを位置づけようとするならば、ヨーロッパ社会学からのアメリカ社会学の自立という過程にも深く関係しており、本稿で引用してきた一九四〇年代のマーソンはその先頭走者の一人

として「ヨーロッパ種」からの「アメリカ種」の独立を宣言し、しかも両者の「強力な雑種」こそがコミュニケーション研究にあつてもっとも望ましい研究方法なのだと主張していた。

この場合注意しなければならないのは、あくまでも本流は「アメリカ種」であり、「ヨーロッパ種」は補助的に理論的視点を提供するという役割を果たすものであった。もちろん、この種の結論はマートン自身の立場や経歴を考えればごく自然なものである。いわゆる「実証」の側、つまり「アメリカ種」に属する世界中の研究者たちも、マートンの結論に賛成するだろう。実証科学の本流にとつて、フランス語やドイツ語の新奇な術語を用いた「理論」などは、単なる装飾品として論文の前書きにでも言い訳程度に登場すればよい。はるかに重要なことは現場で汗をかくことだというわけである。これに対して、「ヨーロッパ種」の人々は、色々なことを言つてやりたいだろう。「ヨーロッパ種」には異論をたくさん考え出す上では優れた雄弁家が揃っている。そもそも、「アメリカ種」と対決する以前に、「ヨーロッパ種」内部で互いに根拠を掘り崩すことに喜びを見出すような人々だからである。

しかし、本当に「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」は別個の「種」なのだろうか？ あるいは、「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」を別個の「種」と考え、両者を競合関係におくこと自体が「ヨーロッパ種」に対する「アメリカ種」の優位を決定付けているのではないのだろうか？ 本稿ですでに詳しく論じてきたように、それぞれの学問を別個の制度として捉えるならば、「ヨーロッパ種」には「アメリカ種」に対決する術はない。

しかし、マートンの考えとは別に「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」を全く別次元の概念として捉え直したならばどうだろうか。つまり、互いに対等に競合し合う「種」として考えることを停止するのである。その場合、有力な手がかりはマートンが「ヨーロッパ種」の欠点の原因として指摘していた歴史や芸術といった領域と「ヨーロッパ種」の深いつながりである。マートンにとつて歴史や芸術は「ヨーロッパ種」の知識社会学をいつまでも人文科学の領域に留まらせ、「高度な」実証科学（大掛かりな研究組織による確実で普遍的な真理の蓄積）として自立させることを阻む古くからの「悪友」のようなものであった。歴史家の回顧に付き合ったり、芸術家を気取ったりしていたのでは、知識社会学、あるいは社会学全般は、いつまでも半人前の社会科学なのであるというのが、マートンの考えであった。

このように論じるならば、「ヨーロッパ種」の人々はすぐに特定の反応を示す。特定の反応は、煎じ詰めれば、なぜ知識社会学がマートンのいう意味での実証科学として「高度化」しなければならぬのか？ という問いとして要約することが可能だろう。ただし、大規模化し、組織化された実証科学の隆盛を尻目にそれを頭から否定することは、不可能ではないとしても、かなり勇気のいることではある。

現に、この種の議論に対する「ヨーロッパ種」の側からの反応は、マルクス主義の伝統や「ポスト・モダン」と呼ばれる思想によつてすでに議論されてきた。「ポスト・モダン」を標榜する人々の中でもマルクス主義の影響を強く受けた人々は、高度な分業による学問の

制度化を批判し、それらが世界を巻き込んだ巨大な権力(独占資本、帝国主義、システム、あるいは「帝国」)の一端を担うものであると主張してきた。制度化された実証科学はそれ自体が資本主義的な生産様式に類似するものであり、そこで働く研究者もまた産業労働者と同じく「疎外」され、自らの知の代償に生活の糧を得ることで、精神生活の自由を自ら放棄しているのだというわけである。レトリカルな言い方をするならば、巨大な組織の一員として共同研究に励む人々は、自らの精神の自由を拘束する鉄鎖を自ら鍛造してきたのだというわけである。

この種の議論は「ヨーロッパ種」の伝統に親しんだ人には非常に受け入れやすいものである。知と精神の自由のために働いてきたと自負する人々にとって、窮屈な約束事や煩瑣な事務仕事ばかりを増大させ、自明の常識を延々と追認するようにしか思われない「実証」がますます要求されることは、決して楽しい状況ではないはずである。そのような趨勢に誰の目にも大きな力を振るっているように思われる巨大資本や政治権力や官僚機構が関与していることを指摘すれば、おおよそ結論は見えてくる。企業や政治家や当局が求め、求められたものを提供する知識人たちは自分たちの自由を犠牲にし、望んで隷属化し、けちな報酬の代償として、古くから続けられてきた知の伝統を裏切っているのだというわけである。さらに、「アメリカ種」が標榜する実証研究が掲げる数値化や数量化といった研究方法も、生活し自由を求める人間の精神を従属化、あるいは植民地化するものであるということになる。個性をもった人間が単なる数値に変換され、量的存在としてモノや道具のように取り扱われるのだ、

といった議論がその後続く。本稿で論じてきたように、マートン自身が戦時期に軍部のプロパガンダに従事していたことは、象徴的な事例であるということもできるだろう。

ただし、この種の議論にも弱点はある。それは精神の自由を探求する知識人と、それを妨げる敵対勢力を最初から前提にして考えてしまうことである。つまり、「アメリカ種」を特徴づける組織化や分業化を自分たちとは切り離された「他者」として特定することで、かえって「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の対等な対立関係をより強固なものにしてしまうことである。言い換えれば、マルクス主義やその流れを汲む「ポスト・モダン」は、マートンの立場に敵対することによって、マートンと同じ結論に到達してしまうのである。

現に、この種の議論を延長していっても、結論の範囲はおのずと限られてくる。マートンは「アメリカ種」主導による統合——「雑種」——を提唱したが、これに対してマルクス主義や「ポスト・モダン」は統合を拒絶し、「ヨーロッパ種」の純粋性を守り通そうとする以外には選択肢がない。つまり、経験主義や数量化をあくまでも拒否し、社会哲学としての自律性をあくまでも強調する立場である。言い換えれば、マートンによる統合案を拒否したならば、「統合しないこと」と、つまり「ヨーロッパ種」の純粋性を探求するという選択肢しか残らないわけである。

「ヨーロッパ種」の人々には、ルカーチやアドルノといった人名を挙げれば、この種の純粋化がどのようなものであったのかがおおよそ納得できるだろう。とりわけ彼らの文章の晦渋さや思考の難解さを思い知らされている向きには、なおさら一層説得的であるにちが

いない。面白いことに、彼らの「後期」は、ちょうどマーティンの仕事と時期的に重なる。例えばアドルノのアメリカ生活は、「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の出会いとして観察するならば、通常のアドルノ論とは別様の側面に光があたるだろう。例えば、アドルノはドイツに戻ってから次のように回顧している。

「アメリカで私は文化を信ずる素朴さから解放され、文化を外から見る能力を手に入れた。はつきり言えば、私にとっては、いかに社会批判をなし、経済の優位についていかなる意識を持つとも、精神の絶対的な重要さは本来自明なものとしてあった。この自明性が絶対的に認められるわけではないことについて私はアメリカで教えられた。ここでは、中、西部ヨーロッパにおいていわゆる教養階層をあまねく支配しているように、すべての精神的なものに対する暗黙の尊敬が支配しているわけではない。このような尊敬の欠如が精神の批判的自己省察を誘発するのである。」(ゲルハルト・シュベツペンホイザー『アドルノ 解放の弁証法』、徳永恂・山口祐弘訳、作品社二〇〇〇年、十二頁)

ヨーロッパとは違いアメリカでは精神以外のものが優位にある……というわけで、通常はこの種の回顧に対して、やはり「ヨーロッパ種」に属するアドルノ信奉者たちがアメリカ社会やアメリカ文化に対する日頃の鬱憤を開陳する。毎度おなじみの議論である。ひどく口汚い罵声が並ぶこともしばしばである。また、マーティンがいう「アメリカ人にとってしばらく以前からごく普通なものになつていった認識論」とも符合しあうものである。アドルノもマーティンも両者

が別個の「種」であり、各々独自の伝統に根ざしていると考えている点では共通している。

アドルノの議論は「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」が対等に存在する「種」であり、対立しあうものであるという考え方を、マーティンとは反対の立場で、代表するものであるということが出来る。

マーティンは「アメリカ種」の立場から「ヨーロッパ種」の取り込み——吸収合併?——を提案したが、アドルノは「ヨーロッパ種」の立場から「アメリカ種」との「混血」を拒否しようとするわけである。ここから後期のアドルノは「ヨーロッパ種」のさらなる純血化を押し進めたと考えることはできないだろうか? 晦渋な文体や難解な思考は愛好者にとってはそれ自体が魅力なのだろう。しかも、マーティンが名指しして非難していた「歴史」や「芸術」は、アドルノの得意分野の、そのまた中枢に位置する。現にアドルノの著作の魅力は、今日の人々が通常に使う意味での「理論」というよりも、芸術に対する独自の感性にあり、カール・ポパーに「貧困」を揶揄されようと。歴史哲学的な省察の深さにある。もちろん、これらはマーティンが提案する「雑種」にあつては最初に排除されるべき要素である。

アドルノの議論は、「ヨーロッパ種」の伝統に根ざした人々には非常に魅力的である。とりわけ「アメリカ種」という「異種」によって喚起された「ヨーロッパ種」の自己認識(アイデンティティ)として解することで、従来の信奉者たちによる秘教的な祖述を離れた理解が可能になるのかもしれない。ただし、「ヨーロッパ種」がおかれている現状は、アドルノとその後継者たちが選んできた路線にも関係していることを考えておかなければならない。つまり、晦渋な

文体に多義的で難解な思考を、さらに難解で多義的にしていく解釈の積み重ねといった路線がもたらしたものである。気がつけば、ごく近い領域の人々にすら理解困難で、気安い言及がはばかれるといった状況になっている。この種の議論は、特定の愛好者——理論オタク——にとってはかけがえのない魅力であっても、それ以外の人々にとっては敬遠の対象でしかない。この点でも、マートンや「アメリカ種」の明快さや理解しやすさに対抗することは困難なのである。

12. 質的研究という対抗案

「こういう次第だから、はつきりしていることは次のことである。すなわち、たいそう急速に、そして徹底的に社会的・精神的な変化が起こる場合になつてはじめて、これまで絶対化されて考えられてきた内容が、一切のものを一つ残らずイデオロギー的な要素をもつものとして考えることができるほどに透明になるはずだということである。」(マンハイム『イデオロギーとユートピア』、鈴木二郎訳)

それでは「ヨーロッパ種」には「アメリカ種」に対抗する方策は他に何も無いのだろうか？ そして、「ヨーロッパ種」はマートンが一九四〇年代に論じた統合案に沿って、遠からず「アメリカ種」に吸収されてしまうのだろうか。今日の学界の状況を覆っている分業化や組織化、研究方法における数量化の趨勢は、その日が近いことを暗示しているようにも見える。

ただし、「アメリカ種」の勢力拡大が無条件に承認されているわけ

ではないことも事実である。例えば、近年になって次第に注目を集めつつある「質的研究 (qualitative research)」という概念を掲げる人々は、従来の社会科学を支配してきた「量的研究」を批判する。ドイツの社会学者で心理学者のウヴェ・フリックは社会学や心理学の領域を支配してきた「量的研究」についてつぎのようにまとめている。

「心と社会にかかわる諸科学は、これまで自然科学の厳密さを模範としてきた。データや分析結果を数量化したり、質問文や回答が前もって標準化された方法を用いたりすることが「科学的」だという意識が支配的であった——原因と結果を明確に分離すること、結果の一般化が可能な研究のデザインにすること、普遍的な法則を公式化すること。

このような自然科学的考え方のもとでは、たとえばサンプルの代表性 (representativeness) を高めるために、人口から無作為にサンプルが抽出される。具体的なケースからできるだけ離れて、普遍的に当てはまるようなかたちで結論が述べられる。観察される現象は、その頻度と分布にしたがって分類される。因果関係とその妥当性をできるだけ明確にするために、研究対象の現象が発生する条件をできる限り統制しようとする。研究者 (インタビュアー、観察者など) の影響をできる限り排除するように研究はデザインされる——このようなやり方で研究の客観性を高め、またその際に研究の対象となる人々の主観的見方ばかりでなく、研究者の側の主観性をも消し去ろうとするわけである。このような考え方に基づいて、実証的社会調査を

実施するうえで守られるべき基準が明確に定められた。さらに質問紙を作成したり、実験をデザインしたり、データを統計的に分析したりする際の手続きがどんどん精密に規定されてきた。(ウヴェ・フリック『質的研究入門 人間の科学』のた

めの方法論』、春秋社二〇〇二年(原著一九九五年)、五一―六頁) 社会科学方法論の領域で二十世紀初頭に行われた議論について詳しい人ならば、古くから知られている論点が生かされて再登場していることに気づくだろう。自然科学の方法論に社会科学が従属するべきなのか、それとも社会科学には自然科学とは別個の方法論が必要なのか、という問題である。そして、フリックは社会科学の無条件の自然科学化を批判する。この著者によれば、自然科学の方法を社会科学に厳格に適用しようとするのが「量的研究」であり、これに対して社会科学の独自性を主張するのが「質的研究」であるということになる。

この議論は本稿で論じてきたマートンのいう「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の相違、さらには仮説演繹法と経験帰納法の対立も根底のところまでつながっている。厳格な経験帰納法はただひたすら客観性を追い求め、フリックの言葉を借りるならば、「研究者の側の主観性をも消し去ろうとする」のである。そして、マートンのいえば、個人の見解を押し殺してまで事実の確定に献身するアメリカの学風をさして、「自己否定の戒告 (a self-denying ordinance)」ということになる。他方で、「ヨーロッパ種」にとって、「アメリカ種」のこのような「成果」は、「割に合わない勝利」でしかない。もちろん、ここまでの論点については、本稿ではこれ以上論じる必要はな

いだろう。

ただし、これに対するフリックの対案である「質的研究」を、マートンのいう「雑種」と比較することは意味のないことではないはずである。

「質的研究の中心的な考え方は、量的研究のそれと異なる。質的研究の基本的特徴は次の四つである。――研究対象に適した方法と理論を選ぶこと。異なった様々な視点を考慮に入れ分析すること。研究者の自分の研究に関する反省をもデータとして取り入れること。多様なアプローチと方法を用いること。」(フリック、七頁)

フリックのいう1. 研究対象に応じた方法と理論の選択、2. 視点の多様性、3. 研究者自身による反照性、4. 多様なアプローチと方法、の四点を一言でまとめてしまえば、「研究対象と研究者の相互反照性を研究に取り入れること」ということになるだろうか。さらに本稿の議論に近づけるならば、「質的研究」の要点は、あらゆる研究対象を一元的な論理で分析し説明することができ、またすべきであるという信念を放棄することにある。

先に論じたように、マートンの「雑種」とは、整備された「アメリカ種」の調査体制に理論的視点を加味するというものであった。「一方の理論的興味のある範疇と他方の経験的な調査技術とを共に備えた強力な雑種」とは、結局のところは、「アメリカ種」の改良を意図するものでしかなかったわけである。言い方を変えれば、科学の根幹をなす真実の確定は「アメリカ種」が受け持ち、「ヨーロッパ種」には理論的考察の部分を受け持つてもらうというわけであっ

た。

ここまで論じてくると、「ヨーロッパ種」に属する人々は、コミュニケーション研究だけに留まらず、社会学全般、あるいは社会科学全般における「理論」の退潮、あるいは不人気に思い至るはずである。本稿で論じてきたテーマに当てはめていえば、一方には行政や企業とも手を結んだ「アメリカ種」の大規模研究組織が、「現場」あるいは「フィールド」の情報を大々的に蓄積し、行政や実業界にとって有用な知識をどんどん提供していく。提供された知識に価値があるとなれば、行政や企業はさらにはたくさんの資金を提供してくれる。また、その種の情報や知識を系統的に入手する技術を学んだ学生は、やはり行政や企業に就職口を見つける可能性も多くなる。そして、ますます多くの人員が養成され、組織されていくわけである。

これに対して、「ヨーロッパ種」の方は、古典をめぐる蘊蓄や難解な秘教的教理を共有し合うごく少数の人々の独占物になりつつある。昨今流行の言葉でいえば、「理論オタク」や「学説史オタク」の世界になりかかっている。先に触れたアドルノに代表されるような思想家の教説が、今日どのように議論されているのかを考えればこのことは明らかだろう。現状では、この分野に他の領域の「素人」が新規参入することは不可能ではないとしても、困難であり、「ディレタント」という呼称を引き受けるリスクを引き受けることを意味する。言い換えれば、他の領域と問題を共有して対話することが次第に困難になっているのである。その一方で、古典をめぐる蘊蓄や難解な秘教的教理に専念することが、「アメリカ種」の伸張に対抗しうる魅力を持っているのかといえ、就職活動をひかえた学生で

なくとも首をひねらざるをえない。他方で、古典の知識や難解な理論についての知見が、今日の社会を理解する上で、他では得がたい着想源になるのかといえ、筆者自身の反省も含めて、現状では困難といわなければならない。多少意地の悪い言い方をすれば、「ヨーロッパ種」が得意とする「学説史」や「理論」は、それ自身がトマス・クーンのいう「通常科学（ノーマル・サイエンス）」と化している。つまり、特定の流儀に沿った探求が、極端まで進展し、知識そのものが自己目的化し、袋小路に突き当たっているのである。袋小路から脱するには、思い切って今までとは異なった流儀に乗り換えるか、本来得意であるはずの「理論」を新たなものに取り替える必要がある。

これに対して、フリックの「質的研究」は、一旦奪われた主導権を「ヨーロッパ種」の側に取り返そうという意図を含んでいると考えることができる。それは理論や思想と呼ばれるものが本来果してきた役割を再度取り戻す試みでもある。言い換えれば、理論や思想は元来何のためにあるのか？ という地点まで立ち返って再度考え直すことである。このことは理論や思想といった領域について考えてきた人々が普段の思考様式を一旦停止して、ごく普通の常識に立ち返るならばすぐに理解できることである。そもそも、複雑で見渡しがたい現実や紆余曲折に富む経験を単純化し、明確な像、視界——ヴィジョン——として提示するのが理論であり、思想だったはずである。過去の偉大な「思想」や「理論」は、善悪・好悪判断は別として、普通の人間では理解できない複雑性を縮減し、普通の知力や感性をもっていれば誰にでも分るような明快な理解を可能にするも

のであった。例えば、「マルクス」や「フロイト」や「ダーウイン」といったヨーロッパ人の人名に結びついた思想や理論は、丁寧に説明すれば中学生でも理解できる議論から成り立っている。もちろん、この場合、これらの人物を正面に据えた専門的な哲学史や学説史研究や理論研究の細かな議論を問題にしているわけではない。そして、このような単純さや明快さが、人々に大きな影響を与え、本稿で論じてきた「ヨーロッパ種」の全盛期をもたらしてきた。

それらの偉大な思想や理論に共通することは、先行研究への十全な言及でもなければ、時代背景についての手堅い理解でもなく、また事実検証の確実性でもない。むしろ、人々が直面する現実や経てきた経験に対して、丁寧に説明されれば誰でも納得するような理解を与えることができたことであつた。その場合に彼らが行つたことは、従来の思想や理論を根底から支えている単純な原理を問い直すことであつた。

フリックの議論に戻るならば、研究対象と研究者の相互参照性を研究に取り入れることは、研究者と研究対象からなる「科学」という行為——認識行為——そのものを問い直すことでもある。もちろん、その場合に「問い直し」の対象となるのは、目下全盛を誇る「アメリカ種」である。「アメリカ種」の人々が「科学的」であることについて自明の前提としている数量化や標準化、客観性の無条件の追究と主観性の無条件の排除、手続きの精密化が、実はごく普通の常識から乖離し、普通の知力や感性をもった人々の理解から離れたところにあることを指摘する。「社会」をめぐる「科学」とその成果は、「アメリカ種」にあつても、特別な教育訓練を受けた専門家以外には実

感の沸かない「真実」に転化しつつあるからである。やはり、クインの「通常科学」という言葉は、「ヨーロッパ種」よりも「アメリカ種」の方がふさわしいだろう。

13. 歴史をめぐる理論的考察… 『バウマン 近代とホロコースト』

「現代とは、生きる理由を通常は構成すると考えられているいつさいが消滅し、すべてを問いなおす覚悟なくしては、混乱もしくは無自覚に陥るしかない、そういう時代である。」(シモーヌ・ヴェイユ『自由と社会的抑圧』、富原真弓訳)

フリックの議論から離れて、「ヨーロッパ種」の社会学の近年の成果について考えると、「ヨーロッパ種」には大きな可能性が残されていることが実感できる。ヒトラー体制下のユダヤ人迫害を逃れてアメリカに亡命したアドルノの名を冠した「アドルノ賞」を受賞したジークムント・バウマンの『近代とホロコースト』(一九八九年)である。悪名高いナチス・ドイツのホロコーストを研究する中で、バウマンはそれまで大規模に行われてきた社会学分野の研究について次のように書いている。

「ホロコースト研究へのもつとも社会的な貢献の一つは、ヘレン・ファインによってなされているが、これもヒューズの助言に忠実である。ナチスが支配したヨーロッパにおけるユダヤ人犠牲者と生存者の数を国ごとに数え、その割合を公式化する

心理学的・思想的・構造的変数を提示することが、自分の使命だと彼女は定義した。すべての一般的基準において、ファインの研究は秀逸である。民族共同体の特質、地域ごとの反ユダヤ主義の強さ、ユダヤ人の文化的非ユダヤ化、地域融合や超共同体的連帯の度合いはすべて注意深く正確に整理され、変数は適切にはじきだされているから、その妥当性に疑いはない。仮定にすぎない因果論は排除され、少なくとも、統計が否定する。

その他の規則性（連帯の欠如と「人々が道徳的規則を破る」確率の高さとの相関関係のような）は統計が証明する。著者の社会学的知识とそれを駆使する技術は非のうちどころがないからこそ、逆に、彼女の著作は一般的社会学の弱点を露呈してしまっている。社会学的言説がホロコーストにかなする暗黙の基本前提を変えないかぎり、ファインの考察方法以外、社会学には考えられないだろう。」(ジークムント・バウマン『近代とホロコースト』、森田典正訳、大月書店二〇〇六年、六一―七頁)

ここで登場するエヴェレット・C・ヒューズやヘレン・ファインといった人々が行ってきた研究が出発点とする命題は、「ホロコーストは近代の機能不全の結果であって、近代の産物ではないというメッセージ」(バウマン、八頁)である。言葉を付け加えて説明するならば、ヒトラーとナチスが行ったホロコースト——ユダヤ人迫害・虐殺——は「近代」の逸脱であって、「近代」そのものとは無関係なのだという理解である。

そこには、近代や近代化は人間を成長・成熟させ、人間に自由を与えるのだという十八世紀の啓蒙主義以来の信念が存在する。さら

に言えば、人間は性善であり、人間が持っている潜在能力を十全に発揮したならば、今よりも優れた社会が実現するのだという信念である。

バウマンの議論はこのような古くからの信念を根底から問い直すものである。簡単に言えば、アウシュヴィッツに象徴されるホロコーストは、世界の最先進国であったドイツの、しかも最高の知性を最大限活用した結果だったというものである。最先端の科学が開発した毒ガスが大勢の人間を殺戮し、殺した人間の死体を最先端設備の焼却炉が灰に加工する。しかも、そこでは最先端の効率的な組織管理が実行されていた。最先進国の最高の知性とその成果が、未曾有の野蛮さや残酷性を発揮し、最悪の結果をもたらす。それは「後進国」や「未開社会」では不可能な「成果」である。

人間の知性や技術が高度になれば、人間の凶悪さも高度になる。バウマンの主張は、少なくとも私見では、無理のないものである。その上、丁寧に説明すれば中学生でも理解できる単純明快さを備えている。ところが、以前のホロコースト研究は「近代」と「ホロコースト」を切り離すという前提を保持するために、近代に特有の野蛮さや残酷性について議論することができなかったのである。つまり、ナチズムに加担した悪者や逸脱者たちがどこに何人おり、どのような属性(宗教・民族・階層)で、何時、どこで何をし、犠牲者が何処から何人生じており、何時どこで何をされた、といった客観的な事実については「ファインの考察方法」にかなうものはない。それは無数の研究者を動員した組織的研究であり、本稿で論じてきたマートンのいう「アメリカ種」の本領が発揮された実例であるとい

うことができる。膨大な数の「事実」は厳密に確定され、そのために標準化された研究方法は、研究に従事する多くの人々が高度な分業によって効率的に作業に従事することを可能にする。そこからは毎年大量の研究文献が生産され、「ホロコースト」をめぐる確実な客観的事実が蓄積されていく。もちろん研究に従事する人々の間からは、事実検証の困難さや物的証拠の消失や、資料を握っている各国当局の非協力的な姿勢に対する不満は常時間かされるだろう。しかし、「ファインの考察方法」が獲得した事実の信頼性や客観性の高さは、「ヨーロッパ種」の学者が机の上で考えた議論と比較するまでもない。

ただし、フリックが論じたように、数量化や標準化は万能ではない。人員が膨大化し、分業が進み、研究組織が完備すればするほど切り捨てられ、結果として見えなくなってくる論点も多くなっている。バウマンの議論に沿っていえば、「ファインの考察方法」は「近代」を人間の正常な進歩過程と見なしており、「ホロコースト」は正常な進歩を外れた逸脱事例であるという前提を離れることができない。この結果、ホロコーストは単なる「ユダヤ人の事件」あるいは「ユダヤ史の出来事」に限定されるか、あるいは「特異なカテゴリー」（バウマン、三―四頁）として近代社会の本流から切り離し、隔離することが可能になる。

「ホロコースト」の起源はキリスト教改宗後のヨーロッパにおける、何百年にもわたるユダヤ人の隔離、法的差別、大虐殺、迫害の周知の記録にまでさかのぼる。とするならば、それは異常に恐ろしいものであるが、民族的・宗教的憎悪の完全な論理

的帰結ともみえる。いずれにせよ、爆弾の信管ははずされている。われわれの社会学理論の大幅な修正はこれにより、まったく不要となった。社会学が蓄積してきた方法や概念でもこうした挑戦への対応、すなわち、ホロコーストの「説明」、「意味づけ」、「理解」は十分可能であるから、近代とその未解明だが確実に存在する潜在力にたいするわれわれの見方も、修正の必要がない。これは結果的に理論的自己満足を生む。社会学の理論的枠組みや実践を正当化するものとして、これまで便利に使用されてきた近代社会モデルに、批判を加えなければならないような事態には至らなかったのだ。」（バウマン、五頁）

バウマンの考えでは、社会学は「ホロコースト」を自らの問題として説明する代わりに、他者——「ユダヤ人」と「特異なカテゴリー」——の問題として外化する役割を果たしてきた。つまり、ヒトラーとその配下の死刑執行人たちの残虐性や非人間性をののしれば、ののしるほど、「ホロコースト」は自分たちとは関係のない逸脱者が行った特異な事件であるということになる。この結果、とりわけドイツ国内では、自分たちは「ホロコースト」とは無関係なのだという古くからの「裏側」の論点が補強されるわけである。

もちろん、バウマンの議論はドイツ国内の責任論にとどまるものではない。むしろ重要なのは、社会学者自身も含めた近代社会とそこで独自に発展してきた近代科学そのものが抱えている「爆弾」について論じることである。

「こうした自己満足的・自己充足的態度にたいする批判は、これまで主として、歴史家や神学者によってなされてきた。こう

した声に社会学者はほとんど耳をかたむけることがなかった。歴史家が達成したさまざまな量におよぶ成果や、キリスト教、ユダヤ教神学者の残した膨大な分量の内省に比べれば、職業的社会学者のホロコースト研究への貢献は些細にして、取るに足らぬものばかりである。社会学者によるこれまでのホロコースト研究が出した結論は、明らかに次のような程度のものにすぎない。これまで社会学がホロコースト理解に付け加えた知識量は、社会学の現状についてホロコーストがさげすんでくれた知識量よりはるかに少ない。社会学者はこの驚くべき事実を直視しようとしなさい。」(バウマン、五頁・先の引用の続き・太字強調はバウマン)

「ヨーロッパ種」らしい意味深長な一文である。とりわけ当人が強調する「社会学の現状についてホロコーストがさげすんでくれた知識量」とは、両者の原理的な相似性を暗示しているようにすら思われる。組織化や数量化・標準化を前面に掲げた「近代」は、社会学も一翼を担う近代科学の原理であると同時に、アウシュヴィッツの原理でもあったからである。

もちろん、この種の暗示めいた同一視には、いろいろな批判が可能である。例えば、組織化や数量化・標準化が、そのまますなわちホロコーストなのだという主張するのならば、学校教育だろうが、公共交通機関だろうが、家電メーカーだろうが、養護老人ホームだろうが、組織として数量化・標準化を行うものはすべてアウシュヴィッツの仲間といえることになってしまわないか? という反論である。その結果、要するに、組織化や数量化・標準化を嫌う

「ヨーロッパ種」の学者が、別の「悪者」であるホロコーストやアウシュヴィッツと無理やり同一視して「アメリカ種」を貶めているだけなのではないか? 「坊主憎けりや袈裟まで」というのと同じではないのか? という、もつともな論評も可能であろう。

確かに、バウマンも含めて「ヨーロッパ種」には、この種の飛躍した議論がしばしば散見されるのも事実である。この種の議論は、マートンがマンハイムの議論について論じていたように、「思想」や「理論」としては興味をそそるものであっても、検証可能な事実命題には結びつかない。そもそもバウマンのいう「近代」とはどういう事実であり、どういう検証項目によって「ホロコースト」と比較対照することができるのか? 確定できる事実で説明できるのか? 「アメリカ種」ならばこの辺り突いてくるだろう。このため、この種の論理の飛躍やアナロジーによる推論を取り出して、バウマンの議論全体を批判することも不可能ではないのかもしれない。

本稿の課題はバウマンの議論について検討することではないので、これ以上の検討は別の機会に譲ることにする。ただし、ホロコースト研究での社会学者に対する「歴史家」の先行について強調している点は、本稿の議論にとつては特別に興味深い。社会学者バウマンが、歴史家や神学者の先行研究を大々的に取り入れようとしているからである。先に行った本稿の議論に戻ると、マートンが「ヨーロッパ種」の欠陥の元凶と考えていたのは、「歴史」と「芸術」や「歴史家」と「芸術家」とのつながりであった。「歴史」と「芸術」は「ヨーロッパ種」の研究活動に恣意性や相対主義的な態度や「芸術家気取り」をもたらす。バウマンがここで登場させている「神学者」がマー

トンにとつていかなる評価の対象になるのかは興味深いところである。ただし、マートン自身の議論に長らく付き合ってきた立場から判断すると、マートンが「神学者」をそれほど好意的に遇するとは考えにくい。

思い出せば、マートンが「ヨーロッパ種」への「歴史」の悪影響を論じたのは一九四〇年代であった。ところが、同じ「ヨーロッパ種」に属するパウマンは五十年後に至っても「歴史」や「歴史家」と手を切ろうとはしないわけである。「ヨーロッパ種」と「歴史」や「歴史家」との絆の深さは、今後も容易に切れるものではないのだから。

同時にパウマンの事例は、フリックの「質的研究」とともに、「ヨーロッパ種」が今後の進路を模索していくにあたって多くの示唆を与えてくれているといえる。そもそも、パウマンもフリックも、「アメリカ種」の伸張に直面しているという点では同じである。そして、両者とも「ヨーロッパ種」の得意分野である「歴史」や「理論」、あるいは哲学的な省察をもって「アメリカ種」の独走がもたらす困難について、それぞれの流儀で指摘するわけである。

結論…走り去る馬と動かない馬車

「しかし、哲学が終わったことを確信を込めて語る人たちによって哲学が営まれている形態のもとでは、私は哲学がこままいつまでも続いてゆくとは思えない。」(ジャック・プーヴレス『哲学の自食症候群』、大平具彦訳)

マートンの小文を手がかりに進めてきた本稿の考察は、「コミュニケーション研究」の枠を超えて社会学全般にまで広がってしまった。再度冒頭の問題に戻ると、マートンが「コミュニケーション研究」について見出した「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の相違は、決してアメリカのコミュニケーション研究やヨーロッパの知識社会学だけに限定される問題ではなかった。自らがアメリカ社会学を代表するマートンが、普通の「アメリカ種」ではないのは、本人自身の研究経歴にも深く関係していた。十八世紀のイギリス科学史から研究生活を始めたマートンは、第二次大戦下の軍部によるプロパガンダ研究に動員され、この分野でも名を挙げる。軍の調査機関が行った大規模な社会調査は、その後の社会研究に決定的な影響を与えることになった。もちろん、戦争はアメリカ社会学が世界に覇権を確立するきっかけでもあった。

他方、「ヨーロッパ種」の定番の議論というならば、マートンのいう「アメリカ種」とは、自然科学の研究方法を社会科学に導入しようとするものであるということになる。興味深いことに、マートンはニュートンに代表される自然科学の歴史から研究を始めた人物であった。十八世紀以来のイギリス自然科学の歴史は、民間の科学愛好家が単独で行っていた研究が、次第に公共領域に統合され、大勢の人員からなる大組織や大規模設備を用いた研究へと移行していく過程でもあった。バルザックの『絶対』の探求』の主人公バルタザールのように自宅の研究室で孤独に実験をしていた科学者は、次第に組織されるようになる。科学そのものも大きな組織による研究に適したものと発展してきた。錬金術にみられるような秘術が、近代

化学に変貌していく過程はその代表である。それは「科学史」という名前の近代の成功物語であったといえるのかもしれない。

科学史から研究を開始したマートンが、軍の研究機関で巨大研究組織の実力を実感し、「アメリカ種」の優越を確信するようになったことはごく自然なことであつた。また、二十一世紀の今日でも、マートンの五十年前の確信を揺るがす事態は起こっていない。あるいは、「ヨーロッパ種」の社会学者、社会学者は、ニュートンの時代といった町の科学愛好家のその後のように、次第に重要性を失い、単なる物好きな趣味人といった位置づけに陥っていくのかもしれない。

ただし、「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の相違は研究組織の相違だけにとどまるものではなかつた。「アメリカ種」がアメリカ(あるいはアングロサクソン圏)の知的伝統である経験帰納主義に基づいているのに対し、「ヨーロッパ種」は仮説演繹主義を基盤とする点でも異なつていた。面白いのは、科学論・科学哲学の領域では仮説演繹主義が幅を利かせており、「ヨーロッパ種」に属する思想家たちや理論家たちが活躍していることである。ただし、経験的な事実の確定に専念する「アメリカ種」の社会学者の多くは、残念ながら科学論や科学哲学の領域の議論には興味を抱かない。この点が「ヨーロッパ種」による「アメリカ種」への批判が往々にして空振りに終わる一因でもある。

これに対して、マートンは「ヨーロッパ種」の弱点である事実確定の弱さについて次のように書いていた。

「野心満々たるヨーロッパ種は、説明しようとする事実そのものの確定を殆んどおろそかにする。問題の諸事実を決定すると

いう仕事は困難で、しばしば苦勞の多いものであるが、こういう仕事をなおざりにして、すぐさま仮定された事実の説明にとりかかる知識社会学者は、せいぜいのところ馬の前に馬車をくくりつける位がおちである。誰でも分る通り、もしこんなやり方で少しでも馬車が動くとなれば、一般に後へ動くだけであつて、これは物を運搬する場合でも、知識の場合でも同じことであろう。さらに悪いことには、場合によると馬が全く姿を消し、理論の馬車は新しい事実の輓具をつけられるまで、動かないままに放置される。ただここでせめても幸いなことには、或る説明的観点は、最初それが説明しようともくろんだ事実がその後全く事実でないと判明したときでも、なお依然として生産的である——こういうことが科学史上一度ならずあつたということである。しかし、こういう実りの多い誤謬をあてにするわけにはいかない。」(四〇四頁)

「ヨーロッパ種」の知識社会学者は、「馬車の後に馬をくくりつける」。要するに、盛りだくさんの着想という荷物を満載にした馬車ばかりは立派でも、馬車を前進させるための手段がなおざりにされているので、研究は一向に前進しないというわけである。これに対して、「アメリカ種」の場合は脚の良い優秀な馬が自慢である。時には、しびれをさらした馬が馬車を置き去りにして走り去ってしまうこともある。

マートンが主張したいのは、「アメリカ種」の自慢の馬を、「ヨーロッパ種」自慢の馬車の前にくくりつけて両者を力強く前進させることである。もちろん、その場合に先導するのは「アメリカ種」の

方なのであろう。ただし、マーティンの考える統合案は、「ヨーロッパ種」の人々の満足を得られるようなものではなかった。比喩を続けるならば、「アメリカ種」の馬は、いったい社会学をどこへ連れて行ってくれるのか? 「ヨーロッパ種」にはどうしても納得できないからである。おかしなところに連れて行かれるくらいならば、立派な馬車の中で自慢の荷物に囲まれて休んでいた方が、よほど快適な暮らしができるのではないかと考えることもできる。そもそも馬などはじめから不要なのではないか? という人もいるだろう。あるいは、馬車をひいていた馬がいつの間にか大型機関車に取り替えられ、知らないうちに見知らぬ土地の収容所にも連れて行かれる危険がないとはいえない。ちなみに「ヨーロッパ種」はこの種の話題については、ひどくこだわるわけである。

本稿の考察を一旦終わるにあたって実感していることは、「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の間にあるほとんど架橋不可能な相違を、まさに不可能であると確認できたことである。これは通常の論文の結論としてはまったく消極的なものでしかない。マーティン自身が試みたように従来異なっていると考えられてきた両者を統合できる! と結論付けることができるのならば、はるかに意欲的な仕事であるといえよう。要するに、本稿は差異を差異として、亀裂を亀裂として放置しているだけなのである。

しかし、この放置は年来「ヨーロッパ種」に取り組んできた人間にとつては、己の自己認識(アイデンティティ)をかなり根底から再確認する作業でもあった。「ヨーロッパ種」の伝統の中で育ってきた筆者は、年長の人々が「アメリカ種」について口を極めて罵る様

子も個人的にいろいろ見聞きしてきた。それらはしばしば感情的で、要するに頭から意義を認めないといった態度が先行した。嫌いなものは嫌いで、駄目なものは駄目だ、というのが論旨だったわけである。そういった人々は、多くの場合、嫌いな「アメリカ種」がどういう原理で動いているのかということ立ち入って考えることをしようとしなない。何かよく分らないが大勢の人々が機械を多用して図や数字がたくさん並んだ論文を大勢で書いていて、といった程度の認識である。結果として、両者の間の相互不干渉、住み分けが長く続いてきたわけである。

住み分けは、とりわけ弱者の側にとつては、それ自体として有意義な戦略であったのかもしれない。ただし、大通りの雑踏を避けて横丁に閉じこもっていると、次第に風通しが悪くなつて息苦しくなってくるのも事実である。それは自ら伝統工芸品のような立場に入っていくことでもある。巨大組織が生産する工業製品に対して、「ヨーロッパ種」が自らを伝統工芸品として自己規定することは、決して見栄えのしないことではないかもしれない。

しかし、私見では「ヨーロッパ種」には、マーティンが考えたような統合案以外の選択肢がたくさん残されている。本稿では、それらの例として、フリックの「質的研究」論やバウマンのホロコースト研究の事例を見てきた。両者にはやはり、マーティンがいう「アメリカ種」への「ヨーロッパ種」の側からの批判が共有されており、それぞれに「アメリカ種」の支配する学界の主導権を取り戻そうとする意図が観察できた。

フリックの議論の要点は、研究者が一方的に研究対象を研究する

という古くからの研究方法を問い直すことであつた。研究方法は研究対象によつて変更されるべきであり、研究によつて研究者自身の視点も変化するべきである。つまり、「研究対象と研究者の相互照性を研究に取り入れること」は、「アメリカ種」の巨大研究組織には困難な研究を社会科学において実現することを意図している。その場合に基盤となつているのは、繰り返しになるが、やはり仮説演繹法の信念であつた。

バウマンの議論は、マートンが戒めた歴史学とのつながりが社会学研究に大きな意義を持ちうることを明らかにしていた。バウマンの場合、研究対象が研究対象だけに、それ自体のもつ磁力によつて議論が引つ張られていってしまう危険がつけねに付きまとう。しかし、このことは同時に、「ホロコースト」くらいの存在感がある史実でなければ、「アメリカ種」の圧倒的な影響力に対抗できないともいえる。確かに、ごくありふれた歴史上の事例だけでは、マートンの歴史学批判に対決することは不可能であるようにも思われるからである。この意味で、バウマンは極度に刺激的な素材を使うことで重要な論点に気づかせてくれたともいえる。

それは、本稿を導いてくれたマートンには申し訳ないことだが、歴史を正面に据えた歴史科学として知識社会学、さらには社会学を考え直すことである。

こうして重要な論点に向かうことができる。それは、マートンの意図とは全く別に、「アメリカ種」に代表されるような経験帰納法が蓄積してくれた「事実」や「真実」をも「史料」として前進していく歴史そのものを対象として、知識社会学を再度構想することであ

る。

多少角度を変えていうならば、二十世紀後半以後、「ヨーロッパ種」は戦略を間違えていた。彼らは「ポストモダン」の旗を掲げて、自分たちの祖先を攻撃することに熱心であるあまり、自分たちの存在根拠そのものまで掘り崩してしまつた。まさに「知の自食状態」である。結局、「ポストモダン」を掲げたヨーロッパ種の主張を突き詰めれば「なんでもよい」ということにしかならない。そして、従来の議論が「脱構築」されて、普遍的な問題よりも個別的な問題、長期持続よりも今ここにある一瞬のほうが「すぐれている」と暗黙に認め合うようになってしまつた。そんな自滅状態をよそに、持ち前の組織力で存在感をますます拡大してきたのがアメリカ種だったわけである。ヨーロッパ種、あるいは歴史の知識社会学を再建するためには、二十世紀後半の戦略ミスを把握しなす必要がある。その際に、最も好適な素材——史料——は、経験帰納法が蓄積してくれた「事実」や「真実」なのではないだろうか。もしもそうならば、社会学の社会学は非常に深い含意を知の営為であることがわかつてくる。それは、経験帰納法を掲げる多数の組織——「会社」や「役所」——が時代を追つてどのような「栄枯盛衰」を経ていつたのかを研究することであり、栄枯盛衰にあたって内部の人員がどのような意識を抱き、どのような身の振り方を行ったのかを知ること、知識社会学に更なる貢献を行うことなのである。

(二〇〇八年一月二十五日脱稿)

注

1 フツサル晩年の『ヨーロッパ諸学の危機』が一九三〇年代に論じた問題は、マートンの一九五〇年代の議論によって私自身の実感になった。フツサルは「学問の理念を単なる事実学に還元する実証主義的傾向」について警告を発し、「単なる事実学は、単なる事実人をしかつくらない」(細谷・木田訳、中公文庫一九一二十頁)と断言した背景には、単なる哲学上の学派の対立などではなく、学問観そのものの決定的な対立が存在したのである。言い換えれば、ヨーロッパ哲学者フツサルが感知した「危機」は、アメリカ人社会学者マートンが代弁する「挑戦」と見事に呼応しあっているのである。もしも仮にアメリカの側からの実証科学が幼稚で取るに足らない瑣末主義(トリビアリズム)でしかないならば、ヨーロッパ一流の哲学者フツサルは「危機」を感じる必要などなかったはずである。ところが、こうしてマートンという一流の人材が主張する経験主義や「信頼性」は、すでに説得力ある形で自己主張しており、ヨーロッパが数百年にわたって建設してきた知のあり方に取って代わる権利を主張するまでに育っている。現に、ヨーロッパ人は当時のヨーロッパ人の通例に従って「生 Leben = 人生、人間性」などという曖昧な概念で反撃できているに過ぎない。

2 ジャック・ブーヴレス『哲学の自食症候群』、大平具彦訳、法政大学出版局一九九一年(訳書の題名は「哲学」となっているが、本文中では原文に従って「哲学者」に戻した)。ブーヴレスは「ポストモダン」あるいは「現代思想」の本場を自認するフランス国内の哲学状況についてこの本を書いているが、本稿で論じてきた「ヨーロッパ種」の「自食症候群」として読むと、さらに議論の射程距離が広がるのではないだろうか。

3 ニュートンがイギリスの造幣局長を長く務め、貨幣制度改革に参画していたというのは、歴史の挿話として面白い。いうならば「科学者」による「経済」への直接的影響である。

4 マートンが「強力な雑種」の実例といてあげているのは、フランクフルト学派に深い関係のあるドイツ出身の社会学者レオ・ロウウェンタール(レーヴェンタール Leo Löwenthal 1900-1993)による大衆雑誌に載った通俗伝記の系統的な研究である。ここでは、通俗的伝記の主題が「生産の偶像 (idols of production)」から「消費の偶像 (idols of consumption)」へと移行していくという理論的仮説(ヨーロッパ種)を利用しながら、アメリカ流の系統的な内容分析を行っていることである(四一〇頁)。私見では、ロウウェンタールの研究が仮説演繹法に準拠していることが興味を引く。つまり、アメリカの大衆雑誌の通俗伝記を果てしなく日夜読み続けていたら、「生産の偶像」から「消費の偶像」への移行という結論が出てきた(経験帰納法)というわけではないからである。この点では、マートンの意図とは別に、ヨーロッパ種の仮説演繹法の優越が印象付けられる事例を、マートン自身が挙げていることを見落としてはならない。言い換えれば、ロウウェンタールはアメリカ式の調査技術を学んではいるが、あくまでもヨーロッパ種なのである。

『文学と大衆文化』(Literature and mass culture 1984)その他で有名なロウウェンタールは、フランクフルトの社会研究所の有力メンバーであったが、ユダヤ系のため一九三三年にアメリカに亡命し、コロンビア大学に職を得ている。戦争中は、戦時情報局(Office of War Information = OWI)の仕事にも参加した。アドルノやホルクハイマーといった同時期の亡命者が戦後フランクフルトに帰って社会研究所の再建に従事したのに対し、マルクーゼやフロムのようにアメリカに留まることを選んだ。以下「マートンによる原注」Leo Löwenthal, "Biographies in popular magazines," P.F. Lazarsfeld and F. Stanton, (editors), *Radio Research, 1942-1943*, (New York: Duell, Sloan and Pearce, 1944). たゞこの研究の現物は筆者未見。

5 引用文に付記された出典は、Adorno, *Gesammelte Schriften*, Band 10-2, S.734)

6 ポパーとアドルノの間の「実証主義論争」は、本稿で論じてきた「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の間の対立という意味合いを含んでいた

と考えることもできるだろう。自らヨーロッパの新カント派の議論を引き継ぐ形で理論形成したポパーを、もちろん「アメリカ種」だけに特定することはできない。また、本稿で論じてきたように、科学論の領域でポパーが主張した「仮説演繹主義」は、「ヨーロッパ種」の屋台骨を再建するための議論である。ただし、ポパーがいう「批判的合理主義」が社会工学という発想を力強く後押しし、それが英米圏の論者に熱狂的に受け入れられたことは記憶しておかなければならない。現に同論争にあつてアドルノと追隨者たちがポパーの議論を批判する場合の力点は、ポパーの「実証主義」であり、「社会工学」という発想が必然的に含んでいるとされる無批判な権力弁護であるといった論点である。これらについてのアドルノ等の熱狂的なまでの非難は、具体的な論敵であつたポパー自身よりも、第二次世界大戦後にますます影響力を増してくる「英米圏」、とりわけ本稿でいう「アメリカ種」への敵意に関係していたのではないだろうか。

7 マートンは「ヨーロッパ種」の技術的側面に対する無関心について指摘した後、「アメリカ種」について次のように書いている。

「これと対照的に、アメリカ種は技術に関心をよせているため、信頼性の問題に系統的な注意を払わざるを得ない。一度この問題に系統的な注意が払われると、その問題の性質はいつそう正確に理解される。例えば、マス・コミュニケーションを研究しているアメリカの一学者は、内容分析では「範疇が複雑であればある程、信頼性が低い」といつているが、ヨーロッパ流の知識社会学には、こういう認識は全く現われる余地がない。またこの事例をみれば、初期の段階にあるマス・コミ研究が技術的正確さを得るためには、どんな代価を支払わねばならないかも分る。というのは、範疇化の複雑性が増すにつれて信頼性が減ずるといふことが一様に分つて以来、高度の信頼性に達するには、きわめて単純な一元的範疇を用いて作業すべきだと考えられるようになってきたからである。それが極端になると、内容分析は「賛成、中立、不賛成」「肯定、中立、否定」というような抽象的範疇で仕事をするようになるだろう。そしてそのために、調査の機縁となつた問題そのもの

がしばしば放棄される。しかもその代りに理論的に重要な事実が取上げられるかという点、必ずしもそうではない。ヨーロッパの学者にすれば、そんなことは割の合わない勝利だということになる。というのは、理論的重要性を棄てて、信頼性を得たことにならるから。」(四〇九頁：太字強調は犬飼)

8 以下バウマンによる注記： Cf. Helen Fein, *Accounting for Genocide: National Response and Jewish Victimization during the Holocaust*, Free Press, New York 1979.

9 ホロコースト研究者エドヴェット・C・ヒューズ。以下、バウマンによる注記： Everett C. Hughes, "Good People and Dirty Work", *Social Problems*, Summer 1962, pp.3-10.

10 有名な歴史家の中でも、最もマートンのお気に召さないタイプの歴史家の一人が、すでに一九三〇年代前半に次のように書いているのを引用して、本稿を閉じることにした。これはマートンに対する一種屈折した賛辞でもある。

「近代産業方式は、分業において人間的な一面をもち、近代西欧の科学的考えを人間生活の物理的環境に適用するという点で非人間的な一面をもっている。その運用方法は、多数の人間の労働を機械的に調整して、原料から製造できる物品を間断なく生産して、その生産能力を最大限に維持することである。この産業方式の諸特徴は、過去半世紀の間に、西欧思想の理論はもとより実践にさえ現われたのであつた。わたくしは少年のころ、自然科学の一部門に卓越した位置を占めていたある教授の家に、ときどき滞在した。そこには本棚で囲まれた書齋があつたが、わたくしが訪問するたびに、そこに並べてある書籍が、変わつていったのを覚えてゐる。はじめてわたくしがその書齋を見たときには、多くの本棚には、一般的な文学書、一般的科学書、書齋の主人が専門とする科学の一部門についての一般的な書籍が詰まっていた。ところが年月が経過するにつれ、これらの本棚は、つぎからつぎへと、主人の専門に関する六種ばかりの学術雑誌——それらは、違ふ筆者

の多くの研究論文を一括して無趣味に製本した、感じの悪いものであった——の容赦ない進出によって侵略された。これらの各巻は、言葉の本来の意味において、書籍ではない。そのわけは、内容に統一性がなく、各論文間には、その教授が専門とする科学の一部分になんらかの関係があるという、きわめてかすかなつながり以上のつながりがないからである。科学関係の定期刊行物が進出するにつれて、書籍は退却した。わたくしは後になって、これらの書籍を屋根裏の物置で再発見したが、ここではシェリーの『詩集』とダーウインの『種の起源』はともに島流しの運命をかこち、

荒削りの棚の上で、ゼラチンのなかに微生物を保存してあるガラスびん等と雑居していた。その書齋は、行くたびに、前に行ったときより、見たところ快適さを失い、また居心地も悪くなっていたのである。これらの定期刊行物は、そこに分業があり、原料から機械的に製造される論文の最大限の生産が維持されているのであるから、まさに「書物の形態」をとって現われた近代産業方式なのであった。」(アーノルド・J・トインビー『歴史の研究』、第一巻、下島連他訳、経済往来社一九六九年、四―五頁)